

育成…というけれど、大事なことはそこじゃない。】

手島利夫

お世話になっております。前号の5月10日からだいぶ間が空きましたが宇都宮大・群馬大、川崎市立平間小、成蹊小、板橋区教育委員会のMIRAISCHOOLアカデミア、所沢市立南陵中、同北秋津小などでお話をさせていただいたり、地域の祭りの手伝いで元気に飛び回ったりしていました。卒業生との楽しい出会いもありました。さて…

最近、色々なところで「思考力・判断力・表現力等確かな学力の育成」という言い方を目にし、耳にします。しかし、これらは本当に私たちが目指すべきものなのでしょうか。「思考力・判断力・表現力等確かな学力の育成」を目指していれば、子どもたちに生きる力としての「確かな学力」が育つのでしょうか。ここに深い落とし穴があるのです。

「確かな学力」から「問題解決的な学習」を創り出す

文部科学省の示される資料に、このような図が出ています。私はこの図（図1）を元に確かな学力とそれを育む学習過程づくりについて先生方によく、お話をします。

図1 文部科学省教育課程課教育課程企画室 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/dayori.htm
この図の中に出てくる確かな学力の要素を先生方と話し合いながら再構成すると、次の

図2のようになります。問題を発見し、そのことについて考え（思考）、判断し、表現し、解決に至るといふ学習の流れ（学び方）が見えてくると同時にこの学びを通じて知識や理解も育ちます。また、この学習全体を「学ぶ意欲」が支えているように見えます。

この図2の「〇〇力」といふ部分は、学習の過程としては「問題に気づく」「学び・調べる」「まとめ・吟味する」「発信する」「実践する」といった言葉に置き換えることが出来ます。また、そのようにして生まれた「学び方」を「問題発見的な学習過程」と呼ぶことも出来ます。図3をご参照ください。



図2「確かな学力」の要素を再構成した図
2025年4月に手島が構成



図3 確かな学力から生まれた学習過程
2025年4月に手島が構成

このような学習過程で学びが進むと、学習者にとって自分ごととして意欲が高まり、それこそ、「主体的・対話的で深い学び」が実現できるのではないのでしょうか。このような学び方は多くの先生方も実践されてきたように思います。

1998年に改訂された学習指導要領では「生きる力の育成」「自ら学び自ら考える力」を指針に掲げ、総合的な学習の時間が始まりました。先生方は新たな時代の教育の姿を求めて、様々な研究会に参加され、授業づくりに工夫を重ねていらっしゃいました。当然、子どもさんたちにとっても価値ある授業改善が進んでいると思っていました。

「私たち、主体的な学習なんてしていません。先生たちにやらされていただけです。」

2025年5月に宇都宮大学・群馬大学共同教育学部3年生の学生さんたち368名にESD教育法という授業をさせていただきました。教科等横断的な教育課程の工夫や主体的・対話的で深い学びづくりについての指導もしました。この学生さんたちは2004年頃に生まれ、生活科や総合的な学習の時間の中で育ってきた生徒さんでした。

その学生さんたちに「皆さんは小学校以来高等学校までの12年間、そして大学生になってからも含めて足かけ15年間の学生生活を振り返って、『自分は主体的に学んだ経験が、一度でもあったな』と思いますか」と問いかけてみました。その結果が図4です。

私の予想以上に、主体的な学習を経験したことのある学生さんが少なく驚かされました。

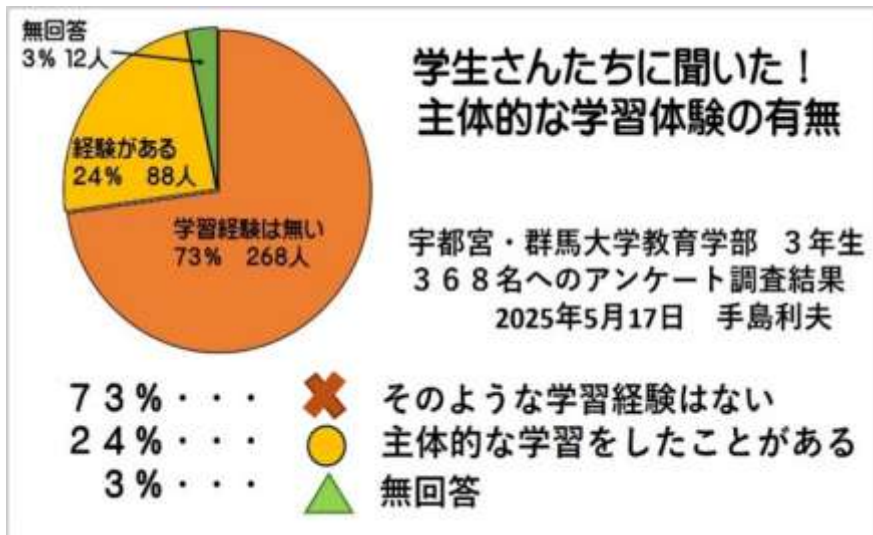


図4 学生さんたちに聞いた主体的な学習体験の有無

2025年5月17日宇都宮・群馬大学共同教育学部にて手島が調査

そればかりではありません。主体的な学習体験についての感想を尋ねてみると、アンケート用紙の中から図5のような文言があふれ出てきたのです。つまりは、総合的な学習も含めて「調べ学習」が盛んに取り込まれ、子どもだった彼らはそれを「先生にやらされている」と感じていただけだったのです。当時の研究発表会では、「子どもたちが主体的に調べている姿」「自分たちでまとめたり、その結果について話し合ったりしている姿」「見事に発表している姿」などが公開されていました。私たちはそのような姿をめざし、授業改善に取り組みました。しかし児童・生徒は**教師の望みにいかに上手に応えるか**ということをめざしていたのです。そして「自分たちがやりたくて夢中で学んでいたわけではなかった」というのです。そういえば、火花が散るような「学びへの動機づけ」や実践に夢中で取り組み「自ら行動変容を繰り返す姿」などは、研究発表会でも見たことはほとんどありませんでした。子どもたちの方が教師よりもはるかにしたたかだったとも言えそうです。でも、子どもたちにこのような思いをさせる「調べ学習」とは、なんと罪の深い指導法だったのかと、あきれられるばかりでした。

「よく『子どもの思いや願いに応じて』という言葉を目にするが、それは指導上の建前で、実際には教員のやりたいことを押し付けられているなど感じてきた。私が小学生の時に受けた工コに関する授業も先生から与えられた課題をこなすことが目的になっていて、工コに対する考えが大して深まっていたわけではなかった。」

宇都宮大学・群馬大学共同教育学部 集中講義
「ESD教育法」授業後アンケートより

2022年8月9日

図5 主体的な学びに対する学生たちの気持ち・アンケート結果 手島の調査による

しかし、同じ総合的な学習の時間の話題ですがうれしいこともありました。つい先週の土曜日（6月13日）のことです。江東区内の街角で「手島先生ではありませんか。懐かしくてついお声をかけてしまいました…」と一人のお嬢さんがお声をかけてくださったのです。私の勤めていた八名川小学校を10年ほど前に卒業された方です。小学校での思い出ってどんなことですかと聞くと、「八名川小学校での勉強がとっても楽しかったことです。中でも、総合的な学習の時間に私たちの町の歴史についてみんなで手分けして調べたり、調べたことを深川江戸資料館内の江戸時代の町の中で発表したりしたことなど今でも忘れられません。」とのことでした。

この学習では問題に気づく段階を丁寧に指導し、「深川八郎右衛門が小名木川北岸一帯の開拓を行い、その深川の苗字を村名としたことや、学区域を流れる小名木川が関東一円からの物資を日本橋に運び込む物流の大動脈の終点だったことなど基本的な事実をきちんと教えたり気づかせたりしました。学びに火をつける段階では小名木川沿いの町に多くの労働者や文化人が集まり、様々な文化が開花したことを中心に指導しました。冷蔵庫の無い時代の工夫として、江戸前の魚貝をマグロの漬けや炙り、鰯やコハダの酢め、煮穴子やゆでた海老、甘辛く煮た赤貝、鯛のこぶ締めなどを酢飯の上に防腐作用のあるわさびと一緒に握るなど様々な工夫に気づかせたりしたのですが、その際に、町の寿司屋さんから担任の先生に江戸前の復元寿司折りが届くといった設定で進めたりもしました。このような導入から、様々な文化や人々の暮らしの工夫などに目が向けられ子どもたちはブレイクしていったのです。

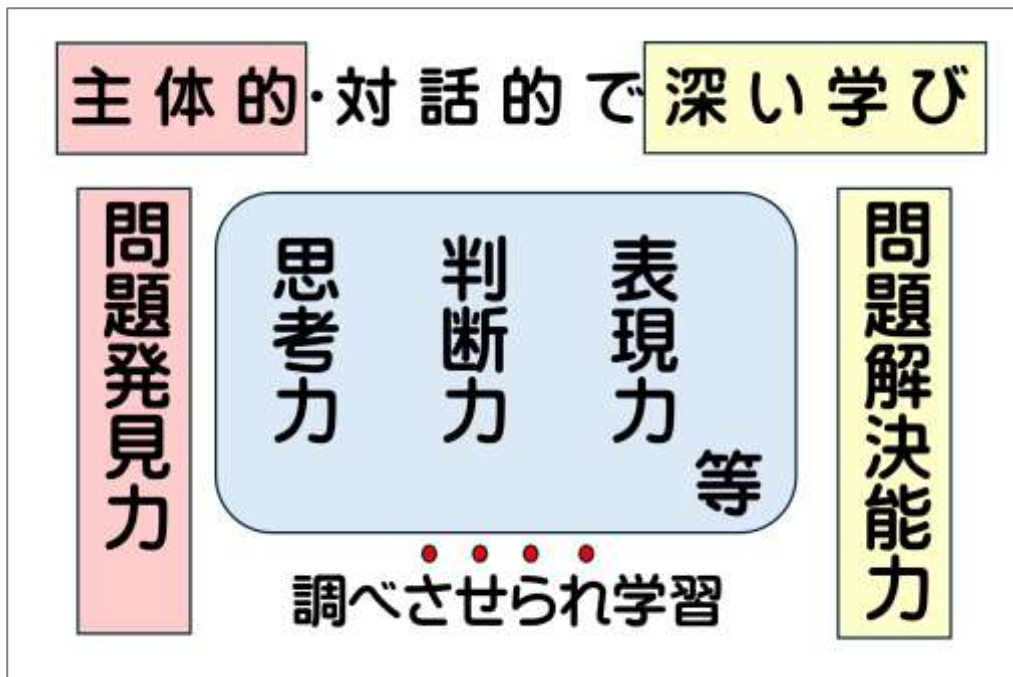


図6 主体的・対話的で深い学びに必要なものは問題発見能力と解決への行動力

図6からは、主体的な学びを進めるには問題発見力が欠かせないこと、深い学びとは、知識をたくさん身につけることでなく学んだことを元に自らの行動を変容させること、そして学習者が自らの行動を通じて問題解決に取り組もうとすることが重要だと読み取れます。「思考力、判断力、表現力等、確かな学力の育成」という言葉に惑わされ、考えもなくそこだけに同調していると、かつての「調べさせられ学習」の二の舞になります。大体、「思考力」「判断力」「表現力」なんて、調べ学習の中でも育つ程度の能力です。そして、調べさせられ学習の中からは、「主体的に学ぶ喜び」や「自分たちが発見した課題を仲間や多くの人々と協働しながら解決していくワクワク感」なんて育ちません。指導者への不信感ばかりが育ちかねないのです。

思考力・判断力・表現力等の育成について、図7の資料にもあたってみました。

国立教育政策研究所の[PDF]「思考力・判断力・表現力を育てる取り組みの実践例」では、「各教科・領域で、レポートの作成や論述などといった、知識・技能を活用しながら自ら設定した課題を解決させる問題解決的な学習活動を十分に設定したことで、思考力・判断力・表現力を育成することが出来たと考えている。」と強調しています。



国立教育政策研究所
https://www.nier.go.jp

[PDF] 思考力・判断力・表現力を育てる取組の実践例



PDF

ファイルサイズ: 455KB

ページ数: 8

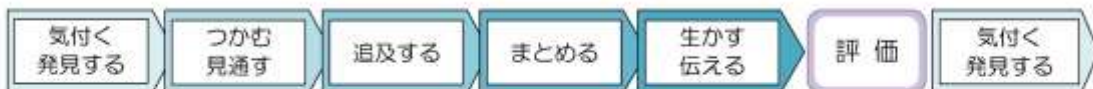
組 思考力・判断力・表現力を高める言語活動 本校では、前述のプロセスに沿って言語活動を行う際、新聞記事や写真、パンフレットといった様々なタイプのテキストを活用し、そこから抜き出した情報を評価しながら、自分の考えを発展させ ... +

図7 国立教育政策研究所 PDF 資料より

問題解決的な学習活動とそのプロセス

○学習活動のプロセス

本校では、各教科・領域で習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用し、自ら設定した課題を解決する学習活動に取り組みさせることが、児童の思考力・判断力・表現力を高めていくと考えている。そして、このような問題解決的な学習活動を以下のようなプロセスでとらえ、単元計画や授業計画を作成する際の基本的な考えとしている。



気付く・発見する / 新たな事象に気付き、課題を発見し、興味をふくらませる段階
 つかむ・見通す / 学習の大まかな内容をつかみ、課題解決への見通しをもつ段階
 追及する / 調べ活動や観察・実験を行ったり、意見交流などを行ったりして事実を追求し、課題解決へ向けて学びを深めていく段階
 まとめる / 観察・実験による結果や、様々なタイプの資料から情報を抽出し、自分なりの考察を加え、自分の考えをまとめていく段階
 生かす・伝える / 習得した概念・法則などの知識や取材・発表などの技能を活用したり、自分なりの考察を加えてまとめた考えを発信したりする段階
 評価 / 自己評価や相互評価を有効に活用し、5つの段階を振り返るとともに、次のプロセスの入口である気付きや発見を確認

図8 国立教育政策研究所 [PDF]思考力・判断力・表現力を育てる取り組みの実践例より

そして事例として示されている小学校の実践例では「思考力・判断力・表現力等」を育てるにあたって、「追及」を始める前に、「気付く・発見する」「つかむ・見通す」という「問題に気づく」段階をきちんと位置づけ、問題解決的な学習過程で指導を進めています。やはり、大事なことは子どもたちの「**学びに火をつける**」学習過程づくりをどう進めるかという点にあるのです。

図9はお遊びで作った資料です。図10を参考に各校で工夫していただけたら幸いです。



図9 学びに火をつける3ステップ google notebook LMに作成させた参考画像

この段階をどのように指導できるかが「教員としての人生」に最も重要な所です。

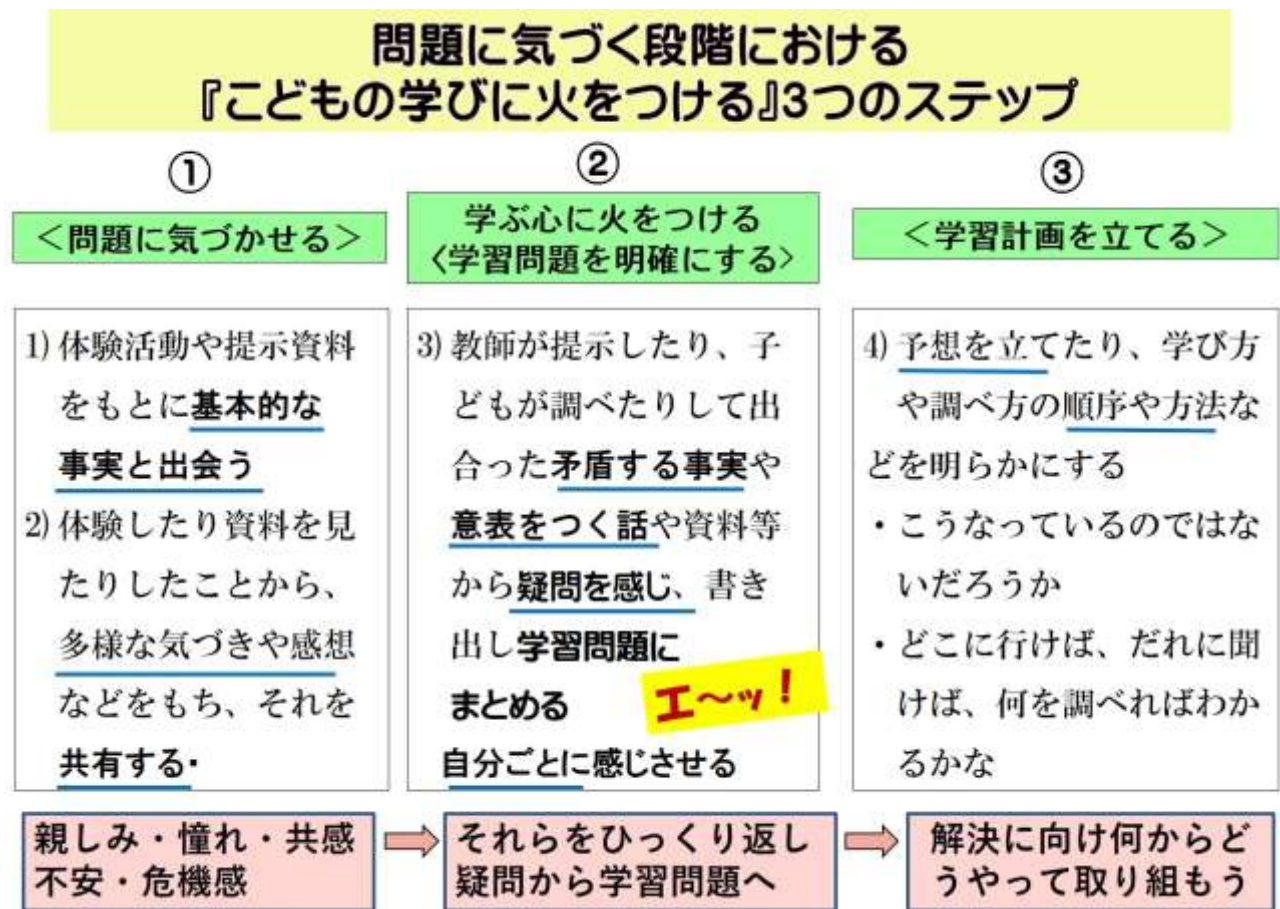


図10 こどもの学びに火をつける3つのステップ（具体的な進め方）手島作成

最後に図11をご覧ください。

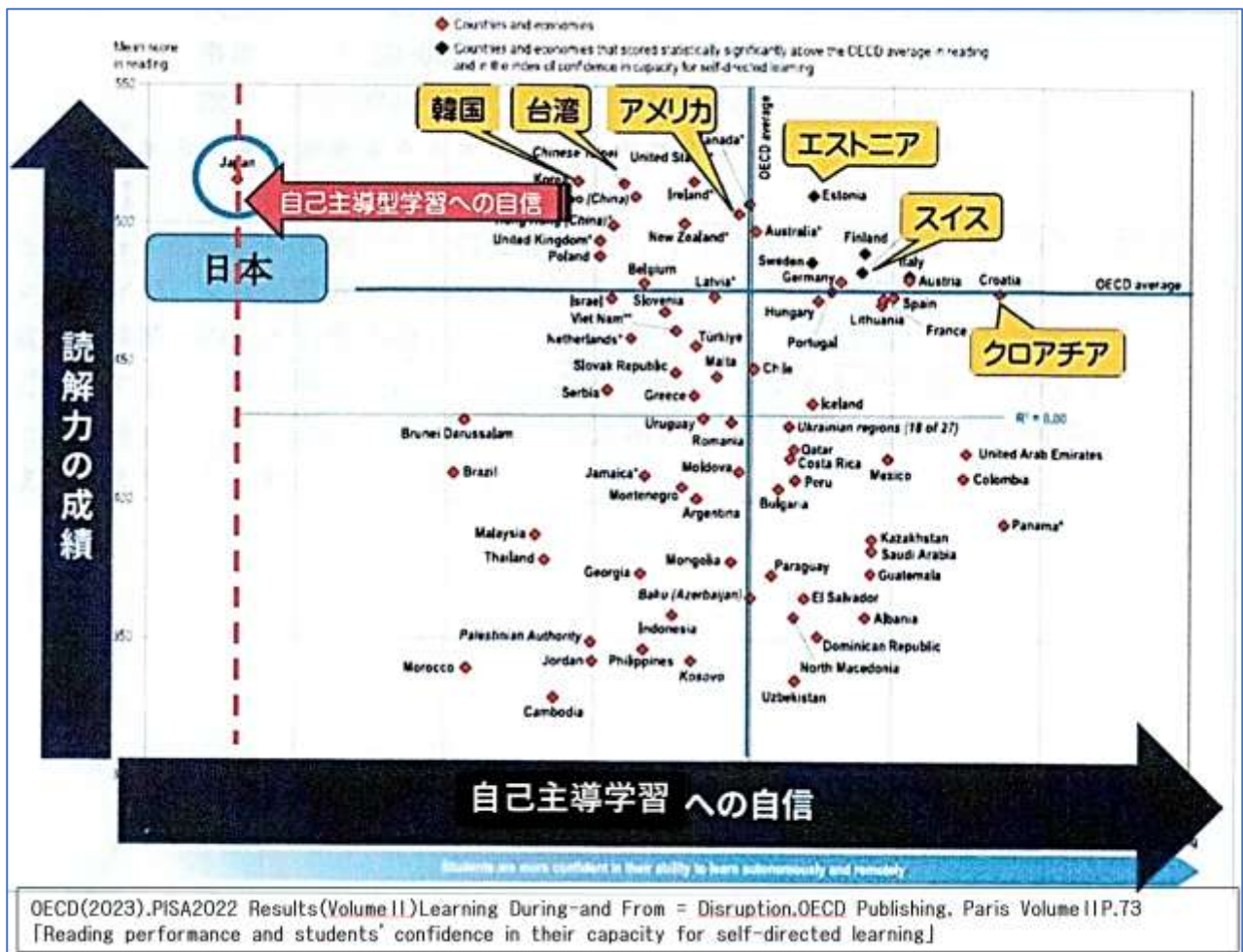


図 1 1 OECD (2023). PISA 2022 Results (Volume II): Learning During - and From - Disruption. OECD Publishing, Paris. <https://doi.org/10.1787/a97db61c-en>

該当図は Volume II の第 2 章 (p. 73) に収録されている Figure II. 2. 8 「Reading performance and students' confidence in their capacity for self-directed learning」です。章の URL は以下のとおりです。

https://www.oecd.org/en/publications/pisa-2022-results-volume-ii_a97db61c-en/full-report/component-9.html

この資料は、2026 年 2 月 27 日 文部科学省「EDU-Port ニッポン・日本型教育の海外展開」にてユネスコ国際教育計画研究所技術協力部長 水野谷優氏が提示された資料です。日本の子どもの「読解力」は世界でも最高レベルなのに「自己主導学習」つまり主体的な学びへの自信の低さが明確に表れていますね。でも、この資料に飛びついていいのか、その出典や調査の意図が気になり調べました。

すると、COVID-19 (新型コロナウイルス) パンデミックへの対応として課された学校閉鎖に対し、教育システム、学校、そして生徒がどのように対応したか、また、それらの対応と学校システムの混乱に対する回復力との関係を探る調査の資料だったことがわかりました。

日本の子どもたちの大半は、読解力は最高に高いのに、学校が閉鎖されてしまったときにどのように自分の学びを続けたらいいのか、全くと言っていいほどに自信がなく、ただ

ただ呆然と過ごすことしかできなかつたという様子がこのデータからわかります。ICTが普及する世界なのに、国としても、地方自治体としても学校としてもタブレットの配布もシステムの構築もコンテンツの用意もされていなかったところに大きな原因があることは承知しています。それでも、同様な条件下にあると思われる多くの国の子どもたちは、自分で何とか手立てを探り学び続けたであろうことが、この資料から伝わってきます。

一体、「生きる力」「自ら学び自ら考える力」はどのように育っていると言えるのでしょうか。惨敗ですね。問題が起こった時に真価が発揮されないような能力しか育っていなかったのです。

だからこそ、次期学習指導要領に向けても「主体的・対話的で深い学びの実装」が求められているのです。私は、思考力・判断力・表現力も重要な能力だと思います。しかしそこをゴールにしている限り、「調べ学習」時代には重視されなかつた「問題への気づき（主体的な学びの源泉）」や「実践を通じた行動の変容（深い学びの正体）」が再びないがしろにされてしまうのではないかと危惧しています。

このお話は江東区立東砂小、北区立王子第一小、愛知県教育委員会研修会や2026年8月29～30に岡山大学を会場にする日本ESD学会等でも発信させていただく予定です。皆様からお仲間を広げていただけるのも歓迎します。よろしくお願ひいたします。

「ESD・SDGs推進研究室」室長 手島利夫

URL=<https://www.esd-tejima.com/>

事務所：〒130-0025 東京都墨田区千歳1-5-10

☎= 090-9399-0891 Mail=contact@esdtejima.com

【参考】ESDGs通信：手島利夫が名刺交換させていただいた方に配信している不定期なメルマガで、文科・環境・外務など関係省庁・大学・研究機関・教員、教育行政、政治家、企業等々の方々も含め1900名様に配信中です。

ご案内するイベント等については、手島との関わりのあるものに限っております。

contact@esdtejima.com にメールでご連絡いただければ、登録・及び削除をいたします。よろしくお願ひいたします。